

4:達成できた  
3:ほぼ達成できた  
2:あまり達成できなかった  
1:達成できなかった

A:自己評価及び改善の方策は適当である  
B:自己評価及び改善の方策は概ね適当である  
C:自己評価及び改善の方策は適当でない  
D:外部評価できない

平成27年度 神戸市立須磨翔風高校 学校評価報告書(学校評価結果のとりまとめ)

重点目標	行動計画	評価指標	達成状況・成果・課題	自己評価	改善の方策	外部評価	外部評価コメント
・「キャリアプランニング」と「人間関係」の授業の効果的な連携	・確かな自己理解に基づく学習とするために、活動内容を相互に活用する		・人間関係では連携がとることができたが、C Pでは難しかった。	3	・「キャリアプランニング」と「人間関係」の授業内容の精選と関連性を検討する。	B	CPⅢは、「量的調査」や「質的調査」などの手法を組み込んで、充実した面白いチャレンジである。チャレンジする生徒が増加することを全教員で検討していただきたい。
・チャレンジする「フューチャープラン」、チャレンジする進路目標の設定	・易きに流れないように、しっかり考えさせるよう適切な情報提供とアドバイスを行う	・フューチャープランや進路目標の設定において、チャレンジすることを意識した生徒が70%以上	・どちらかという安全志向で、チャレンジする意識がある生徒の数が少ないのでチャレンジすることを意識させる情報提供やアドバイスを心掛けた。	3	・翔風チャレンジ等の取組みを深化発展させる。3年次で始めた取組を2年次から始める。(翔風チャレンジ r)	B	「年次の意見を反映させる」が必要である。キャリアプランニングと人間関係の授業を通して、生徒一人ひとりに自らの将来像を意識させる指導は、本校の大きな特徴の一つとなっている。生徒が授業を通して自己理解を深め、人間関係を向上させている。生徒の課題研究の成果を報告集として残すなど、教員チームの熱心な指導とそれに応えた生徒たちの意欲ある取組みが学校全体として意識され、共有できていることは評価できる。結果的に生徒の本校での生活全体に対する満足度が80%となるなど、こうした良い取組み姿勢が継続されることを期待したい。
・「キャリアプランニング」の成果指標検討	・卒業生への追跡調査の実施計画を作成する	・追跡調査実施計画を作成した	・卒業生への追跡調査の実施計画を作成したが、検討課題が多い。	3	・卒業生の進路・就職データの蓄積、活用を始める。	B	卒業して3年目の卒業生と就職後の働きや大学生活を語る機会をもつことにより、社会との接点をもつことができる。
・キャリア教育のまとめの作成	・実践内容をまとめ、外部に配布できるキャリア教育のテキストを制作する	・キャリア教育の実践報告を兼ねたテキストを作成した	・実践内容をまとめ、外部に配布できるキャリア教育のテキストを制作した。	3	・2年次から継続して指導できる体制を作る。可能な限り、上級生の活動・発表を下級生に見せる工夫をする。	A	生徒自身が興味を持って取り組める科目や課題を提供し、考えることの楽しさに気づかせる授業を提供し続けることを期待したい。
・自己理解と他者の多様な価値観の理解	・「人間関係」の授業打合せにおける狙いの共通理解を徹底する	・他者への配慮を意識する生徒が、70%以上	・人間関係の授業でクラスメートを理解し、他者への配慮をするアクティブラーニングを行ったが、おおむねうまくいった。毎回、楽しく取り組んでいる。	3	・「人間関係」の授業や各行事を通して他者を思いやる精神をさらに養うようにする。	A	自己評価の結果が、やや低めとなった項目が多く、学習意欲を引き出す指導の難しさを物語る結果となっている。部活動で優秀な成果を多く取めていることは評価できるが、学習に関して生徒のアンケート結果には、卒業後の進路を推薦で早く決めたい生徒が多いことが現われており、進路決定後の生徒の授業態度の改善が求められる。
・進路希望と科目選択の対応の標準化	・選択科目の整理と科目選択のモデルパターンを作成する	・選択科目の削減とモデルパターンの作成	・選択科目の整理と科目選択のモデルパターンを作成しようとシミュレーション作成中である。	3	自分の希望と適性を理解させる方策を確立する。	B	生徒一人ひとりの学習に合わせた指導には困難が伴うことは、容易に理解できるが、学校としてより良い教育の成果を目指し、授業公開、見学、意見交換など、教員相互の支援体制をより深めることが、さらなる成果に結びつくと考えられる。「翔風チャレンジ」は、学びを続けたい生徒が高め合う場として非常に有意義に機能しており、優れた試みである。
・学習意欲を引き出す積極的な声掛け	・コーチング手法を意識した声掛けや面談を積極的に行う	・声掛けや面談が励みになったとする生徒が、70%以上	・コーチング手法を意識した声掛けや面談を積極的に行うことが増加した。 ・模試のデータを活用し、指導できるようになった。	3	・生徒の本当に知りたいことや頑張りたいことを理解し、それに対する専門的なアドバイスができるようにする。 ・翔風チャレンジにおける面談回数を増やす。 ・模試や予備校などの外部の力を活用する。	A	生徒が何を学びたいのか？何を知りたいのか？ということは、学習への動機づけ(内発的動機づけ)が重要で、時間をかけてでも、生徒自らが考える時間をつくっていくことが大切である。(1年間位かけて考えさせる。)社会形成能力育成という観点から、人間関係の大切さを授業を通して指導し、基本的に学校全体として落ち着いた雰囲気の中、生徒たちが自らの属する集団の中での立場、意味を理解し、創造的、自律的な学びにつながっていることが何える。アンケートからも、教員による生徒への声かけを60%以上が励みになると肯定的に受け止めていることが分かる。90%を超える保護者が本校への進学を勧めたいと考えていることは、注目に値する。
・センター試験の得点率60%を基礎学力とした授業展開	・入試問題等の研究に基づく授業を展開するとともに、家庭学習を促す課題を作成する	・家庭学習の時間が1日1時間以上になった生徒が50%以上	・学習時間調査を継続実施・評価することで、学習習慣定着化への意識が向上したが、各教科科目での入試問題の研究が十分ではなかった。予習・復習が必要となるような状況を作っていかなければならない。	2	・こまめに単元別小テストをして、達成感を味わわせながら、入学段階から家庭学習の必要性を理解させ、実行させる。 ・定期考査や授業の中でも入試問題を意識して授業を行う。	B	客観的に見ると、「キャリア教育」をコンセプトにしなが、同時に「進学校」を目指している。国公立大や開関同立等を目指す学生の意識や能力を高めていき、合格者を増やしていくための「キャリア教育」をしているのか。「進学校」にいくことが目的で、「キャリア教育」は手段なのか。大学合格を最終目的として掲げ過ぎると、「手段」が「目的化」してしまわないか。
		1年次の学習習慣が身に付いたとする生徒が、70%以上	・試験問題の難度を意識しながら、学力向上を目指し、補習等に積極的に取り組んだ。	2	・定期考査問題の難易度を上げ、生徒たちに学習を迫る。	B	
・社会のルールやマナーの定着	・生徒会活動や部活動において、生徒が相互に意識を高めあうよう取り組む	・社会のルールやマナーを意識する生徒が70%以上	・生徒会活動や部活動において、生徒が相互に意識を高めあうよう取り組み、ルールやマナーを意識した生徒が多い。	3	・落ち着いた学習環境作りのためにも、環境整美の大切さをもっと意識させる必要がある。	A	まずは教員から、というアイデアには全面的に賛成である。また、教員も生徒たちに対して普段からできるだけ丁寧で正しい日本語を使っていくという姿勢や態度も大切ではないか。ルールやマナーが相手のことを配慮しての行動かどうか(言われるから仕方なくではなく)を見極めていく必要がある。
・ボランティアサークルの活動の活性化	・生徒が中心となるボランティアサークルの活動を盛り上げる	・ボランティアサークルを中心とした活動が年間30件以上	・ボランティアに参加する生徒は非常に多い。ボランティア活動の意義やそれぞれの行事の説明などをしながら、生徒に呼びかけている。	3	・部活動においてもボランティアへの参加がしやすい体制を構築している。	A	総合学科の高校の中でも受験者数が多く、外部からの評価を反映している。ボランティア活動は地道に活動を続けており、これも地域に愛される高校としての存在感を高める大切な要素となっている。今後も単に件数を増やすだけでなく、こうした充実した内容を継続してほしい。
・学校説明会等への積極的参加	・学校説明会への参加件数を増やすとともに、オープンハイスクールの日程を増やす	・前年よりも参加件数の増加、日数の増加	・「学校説明会」(OHS含む)は、夏3回、秋3回。中学校や塾での「進路講演」は、求められれば必ず参加し続けている。	3	・外部へ発信する内容を全職員で共有する。 ・生徒が活躍する場面を残しながら、内容を精選する必要がある。 ・部活動においても学校説明会への参加ができる体制を構築している。	A	広報活動への積極的な実績は、大いに評価できる。ただし、現場における物理的な問題や課題を抱えており、今後は、プライオリティをつけて成果や結果を出していくという合理的な戦略も検討していく必要があるのではないかと。学年通信やクラス通信の発行、HPの更新など細やかな情報発信を継続的に行ったことや、中学校や塾での進路説明会件数も増やすなど積極的な広報活動が行われている。一部の積極的な教員に過重負担とならないためにも、学校全体の業務の中で教員全体がバランスよく校務分掌にあたることできるよう、校長、教頭のリーダーシップが試される部分である。